

JICA理事長として初、北岡理事長がセルビアとアルバニアを訪問

01



会談を行う北岡理事長(中央)と、セルビアのニコリッチ大統領(右)



セルビアの「難民受け入れセンター」を視察

JICAの北岡伸一理事長は、10月4日から8日にかけて、東欧のセルビアとアルバニアを訪問し、各国の要人と会談を行うとともに、日本のODA事業の現場を視察しました。JICA理事長として両国を訪問するのは、北岡理事長が初めてとなります。

セルビアでは5日、トミスラヴ・ニコリッチ大統領、アレクサンダル・ブチッチ首相と会談を行いました。北岡理事長は、JICAが2006年に西バルカン地域支援の拠点としてセルビアに事務所を開設してから今年で10周年を迎えること、さらにJICA理事長として初のセルビア訪問が実現したことについて喜びを語りました。これに対して、ニコリッチ大統領とブチッチ首相からは、JICAのこれまでの協力について感謝の言葉が述べられました。

この後、北岡理事長は、セルビア初の円借款事業として、大気汚染物質を削減するための排煙脱硫装置の建設を日本が支援している「ニコラ・テスラ火力発電所」を視察しました。

翌6日には、首都ベオグラード近郊にある「難民受け入れセンター」を視察しました。現在、JICAはセルビアとマケドニアで、難民の流入や滞在によって影響を受ける地方自治体の現状を調査し、支援策を検討しています。北岡理事長は、今回の視察を通じて、難民支援の重要性を改めて確認しました。

アルバニアでは7日、エディ・ラマ首相、デイトミル・ブシャティ外務大臣と会談を行いました。会談の中で北岡理事長は、「JICAはこれまで、下水道整備や廃棄物管理、観光振興などの分野で協力をしており、今後ともさまざまな分野で人的交流を通じた相互の関係強化を継続していきたい」との考えを述べました。

また、円借款により首都ティラナで建設中の「ティラナ下水処理場」と、無償資金協力により医療機材を整備した「マザーテレサ小児病院」を視察しました。同病院は、アルバニア唯一の小児科専門病院として、全国から重篤患者を受け入れており、質の高い日本の医療機器が患者の治療に大きく貢献していることを確認しました。

サブサハラ・アフリカ地域の貧困層の電力アクセスの改善

02



灯油ランプをLEDランタンに置き換えて勉強する男子

JICAは、10月19日、株式会社DGB(DGB) (以下「DG社」との間で、「オフグリッド太陽光事業」を対象とする3億円の投資契約に調印しました。

DG社のオフグリッド太陽光事業は、サブサハラ・アフリカの未電化地域の小売店に太陽光パネルを設置し、BOP層中心の来店客に対して、LEDランタンの充電とレンタルや、携帯電話の充電サービスを行うものです。

既に事業を開始しているタンザニアでは、特に地方部の電化率の低さ(4%未満)が問題となっています。電気のない世帯は、灯油ランプなどに明かりを依存しており、煙害や温室効果ガスの排出が問題となっている他、灯油の購入費が家計の負担となっています。

本事業により、これらの解決だけでなく、灯油ランプよりも明るい光の下で、夜間に子どもが勉強したり、小売店が営業したりできるようになります。LEDランタンのバッテリーを使えば、BOP層の生活に不可欠な携帯電話の充電もできるため、生活の改善につながります。DG社は、JICAの投資を通じて事業の拡大を目指します。

国際緊急援助隊・医療チームのEMT認証

03



授与式の様子。チャンWHO事務局長(右から5人目)と鈴木規子JICA理事(同4人目)を囲んで

10月11日、世界保健機関(WHO)のマーガレット・チャン事務局長より、国際緊急援助隊(JDR)の医療チームに対し、緊急医療チーム(EMT)認証が授与されました。

国際緊急援助隊では各国の医療チームの能力水準のばらつきが課題となっており、WHOは2011年にEMT国際標準の策定を開始。JICAもその検討作業に参画してきました。

JDR医療チームは、今年2月にEMT認証を申請し、6月にWHO事務局による認証視察を受けました。その結果、世界で4番目のEMTとして、タイプ1(外来患者に対する初期医療と巡回診療を実施)、タイプ2(外科的手術や入院機能)、スペシャリストセル(透析および手術)の能力を有するチームとして認証を受け、国際登録されました。

認証状授与式で、チャン事務局長は、長期的に質の高い医療サービスを提供できるJDR医療チームを高く評価し、これまでの貢献に感謝の意を伝えるとともに、今後の一層の活躍に期待を寄せました。